極覧

社研だより

第91号

令和3年11月

発　行　京都市小学校
教育研究会社会科部会

責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
林　　正　和

京都市小学校社会科教育研究会
会　長　林　　正　和

今年度，歴史と伝統ある京都社研の会長をさせていただくことになりました。大きな責任を感じながらも社会科への熱意のある会員のみなさんと力を合わせながら，京都市の子どもたちの社会科の学びを進めていけることにやりがいを感じています。「京都の子どもたちに社会科を通して確固たる力を付ける」という熱い思いを基盤に設立された本研究会の意思を受け継ぎ，今の社会に生きる子どもたちが少しでも豊かに生きられる力を，社会科を通じて付けていきたいと感じています。役職の先生方，会員の皆様と力を合わせ，研究会活動を充実させていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いいたします。

さて，新型コロナウイルスの感染拡大を受け，様々な学校行事などの学校の教育活動が中止や縮小されています。学習についても様々な制限が加えられ，従来の形での教育が難しい現状が生まれています。学校だけではなく，社会全体が，新型コロナウイルスの感染拡大など先行き不透明な「予測困難な時代」となり，ICT等の活用などにより，社会の在り方が劇的に変わる「society5.0時代」となってきています。

このような時代を生き抜いていく子どもたちの資質・能力を育成する必要性が高まってきています。そこで，令和３年になって中央教育審議会が「令和の日本型学校教育」の姿として，個別最適な学びと協働的な学びを示しました。その姿を具体化するためにGIGAスクール構想がスタートしています。一人一台のタブレット端末を最大限に利用し，指導の個別化と学習の個性化を図っていくことが狙われています。タブレット端末を利用して，一人一人が主体的に，ねばり強く学習を進め，その学びをもとに，子ども同士や教師や他者と協働しながら学びを深めていく授業の姿が求められています。一つの資料収集に現地まで足を運び，一枚の写真をみんなの資料とするために画面に映し，それをもとにみんなで話し合った姿は，これからの教室にはありません。しかし，資料の手に入れ方，その共有の仕方は進化を続けていますが，個が学び進め，そこから協働で話し合い，学びを深めていく姿は今も昔も，特に社会科の授業では変わりません。不易と流行の部分を生かし，不易の部分を最大限に広げ，深めていくことを目指していかなければならないのです。その流行の部分がGIGAスクール構想により限りなく広がっていくことは間違いのない事実なのです。

令和の時代の学校教育になろうと，その構築に向けて力強く歩んでいくには，高い志をもった教員の存在が必要です。わたしたち京都社研は，「京都の子どもたちに社会科を通して確固たる力を付ける」という志をもち，子どもと共に一歩ずつ歩んできました。社会科の授業を核として子どもたちに力を付け育てていくためには，やはり楽しい授業をつくっていくことが必要なのです。子どもにとって楽しいとはどのようなものでしょう。

社会の姿が授業を通じて見えてきたとき，子ども同士で考えを述べあっているとき，今まで知らなかった事実が分かったとき，目に見えるものからその本質がつかめたときなどなど，社会科好きの子どもをたくさん育てたいものです。本年度会長として，会員や社会科を志す教員が，子どもと共に，社会科の授業づくりを行うことが楽しいと思えるような研究会活動にしていきたいと思っています。京都市教育委員会各課の皆様方や極覧会諸先輩の皆様方には，引き続き，ご支援，ご協力いただければ幸いです。よろしくお願いいたします。

今こそ，『問い』を

京都市総合教育センター　首席指導主事　鈴　木　宏　紀

日頃より本市教育推進にご支援・ご協力いただいておりますこと深く感謝申し上げます。昨年度は，京都市スタンダードの加筆修正・副読本『わたしたちの京都』の部分改訂・『学びのコンテンツ』の作成・『リンク集』やプロジェクトチームによる『ICT活用例』の作成等，本市社会科教育の充実・発展に向けて多大なるご支援・ご協力をいただきましたこと，改めてお礼申し上げます。微力ではありますが，今後も社会科教育研究会の皆様と共に京都市の社会科教育の推進と発展のために尽力したいと思っております。よろしくお願いいたします。

さて，昨年度から全面実施されている学習指導要領におけるキーワードの一つに，「主体的・対話的で深い学び」があります。その定義については，中央教育審議会答申に示されておりますので，ここでは割愛いたしますが，「主体的・対話的で深い学び」は授業改善の視点であるため，その実現に向けて実践を積み重ねていくことが求められています。

様々な授業を参観させていただく中で，子どもたちの主体的・対話的な姿が見られるようになってきました。これは，成果と言えるでしょう。しかし，答申で示されているような，例えば「知識を相互に関連付けてより深く理解する」というような深い学びの姿に出会うことは少ないように感じます。では，深い学びを実現する鍵とは何でしょうか。答申には「各教科の特質に応じた『見方・考え方』を働かせながら…」とあります。つまり「見方・考え方」が鍵ということなのです。

社会科における「見方・考え方」については

> **位置や空間的な広がり，時期や時間の経過，事象や人々の相互関係などに着目して（視点），社会的事象を捉え，比較・分類したり，地域の人々や国民の生活と関連付けたりすること（方法）**

と学習指導要領解説に書かれています。では，子どもがこれらの視点や方法を用いて，社会的事象について調べ，考えたり，選択・判断したりするには何が必要なのでしょうか。それが『問い』なのです。

問いにおいて大切なことは，問題解決的な学習過程を意識して，単元全体で考えることです。単元の学習問題と1時間1時間の問いにつながりはあるか？問いの順序は子どもの思考の流れに沿っているか？問いの解決は学習問題の解決につながるか？などの検討が必要です。また，追究の視点や方向を示す『問いの質』についても吟味が必要です。『事実を把握する』『特色を考える』『意味を考える』『社会への関わり方を選択・判断する』『～の発展について多角的に考える』などの問いを，どのように設定するのか？どのような順序で設定するのか？問いの質は深まっているか？さらに，子どもの問題意識をどのような言葉を使って問いに表すのか？など一言一句についても意識する必要があります。

これらを意識して問いを設定することで，「見方・考え方」は働き，結果として「深い学び」につながるのです。さらに，問いによって子どもの追究意欲が高まることを考えれば，「主体的な学び」「対話的な学び」にも当然つながります。このように考えると，『問い』は「主体的・対話的で深い学び」の授業改善に，さらに問題解決的な学習過程の充実にもつながるのです。

今年度の社会科教育研究会の研究部の提案には，子どもたち自身と社会とのつながりを実感させる授業がうたわれています。そして，目指す授業に迫るための視点の一つに，『問い』と『資料』が挙げられています。社会とのつながりが実感できるような問いや資料とはどのようなものか，どんな順序で，どんな場面で提示するのかなど，この視点一つをとっても研究の深まりが期待されます。

意図的・計画的に問う，時には子どもの発言や思考に応じて臨機応変に問う，どちらにしても深い教材研究と子ども理解の上に『問い』は成立するのです。このことを大切にして授業改善への取組を進めていただければと思います。

◆令和３年度　研究主題◆

「社会を見る目」を育てる社会科学習

～子どもが社会とつながる授業のあり方～

研究部長　森　元　　光

□はじめに

「困れ。困らなきゃ何もできない。」この言葉はHondaの創始者である本田宗一郎氏の言葉です。

昨年度，コロナ禍での学習活動に社会科教育研究会も困りを感じていました。そんな中，前研究部長である松村一也先生は，「ピンチをチャンスに変え，コロナ禍でも豊かな学びを実現していくための新たな学びのかたちを生むことができる研究でありたい」と，研究会をリードして頂きました。

今年度，コロナ禍において緊急事態宣言を受けた学習活動の制限や，GIGA端末を活用した授業のあり方など，めまぐるしい変化に困りを感じていることが多くあります。しかし，今までの研究蓄積を踏まえながら，改めて社会科の楽しさを子どもも教師も実感できる，そのような授業を強く目指した研究会でありたいと考えています。

□今年度の研究について

昨年度の研究では，「子どもの姿を指導記録として残していく」という取組がありました。この取組は評価技能という視点だけでなく，指導者の授業力を高めることにもつながりました。

今年度の研究では，少しだけ見方を変えて，子どもの姿を「想定」した授業づくりを心がけていくことにしています。例えば，「子どもの思考の流れを想定した発問や資料提示」「つけたい力を明確に想定した単元構想」です。昨年度の「授業の中」での子供の姿の見取りから，「授業前」の子どもの姿の想定，と見方を変えています。

このように，昨年度までの研究を引き継ぎながら，様々な「想定」をすることで，研究主題「『社会を見る目』を育てる社会科学習 ～子どもが社会とつながる授業のあり方～」の実現に向けて，実践を進めて参りたいと思います。

□研究の３つの視点

視点１　子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

- 複数の単元を俯瞰し，学習したことを活用できる効果的な単元を構想する。
- つけたい力を明示しながら，子どもが自らの学びを調整する単元構想のあり方を探る。

視点２　子どもと「社会」をつなげる授業づくり

- 子どもが「社会」とのつながりを身近に捉えることができる資料提示を工夫する。
- 子どもの思考の流れを想定した発問や資料提示を工夫する。
- 社会的事象の見方・考え方を「問い」と「資料」で具現化しながら，学習活動を工夫する。
- 選択・判断したり，多角的に考えたりしながら，よりよい社会の形成者として社会に関わっていこうとする学習活動を工夫する。

視点３　子どもの意欲や深い学びにつながる評価

- 単元の中に「ふり返る」という学習過程を位置付け，学習したことをもとに記述したり，まとめたりしながら，評価場面を焦点化して設定する。
- 子どもの意欲や学びの高まりにつながる効果的な「自己」「相互」「教師による」評価を工夫する。

□さいごに

「困れ。困らなきゃ何もできない。」冒頭に紹介した本田宗一郎氏の言葉です。ここでいう困りとは「問い」と言い換えることができるのではないでしょうか。「困ったな。どうすればよりよい授業につながるのか。」と，みんなで大いに困りながらも，社会科学習を充実させていきたいと思います。

3年部会

◇3年部会テーマ◇

**地域の人々の営みから学びを深め
自分と地域とのつながりを
考える子ども**

3年生では，自分たちの身近な地域の社会的事象を観察・調査したり，地図や各種の具体的資料を活用したりして調べ，地域社会の社会的事象の特色や相互の関連などについて考える。地域の様子や人々の姿を通して，それらが相互に関連しあっていることや自分とのかかわりに気づくことで，子どもたちの地域社会に対する誇りと愛情，地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしたい。また，豊かな学びを実現していくために，「これまで」にとらわれず，新たな学びの形を創造していきたい。

3年部会テーマ実現のための方策

視点1

子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

- 複数の単元において学んだことを活用するために，ふり返りを大切にしたり，つながりを意識した単元構想を考えたりする。
- 教材分析を適切に行い，よりよい迫り方を考えることで，問題解決的な学習を充実させる。
- 指導者が，「つけたい力」を明確にもちながら指導を行い，単元末に「どのようなことができるようになったか」を子どもに問い，メタ認知することができるようにする。

視点2

子どもと「社会」をつなげる授業づくり

- 地域の特色を生かした教材を発掘・開発する。
- 子どもの思考の流れを大切にした学習を展開し，必然性のある「発問」や「活動」を工夫する。
- 地域に住む人たちの営みから，社会に向き合い，よりよい社会をつくろうとする意欲を高める。

視点3

子どもの意欲や深い学びにつながる評価

- 適切な評価場面を選びながら，「自分で」「友達から」「指導者から」の評価を実践する。

【授業実践予定】
日時・単元未定
唐橋小学校　辻本　将佳　教諭

〈文責　下京雅小　上田　亮介〉

4年部会

◇4年部会テーマ◇

**自分たちのくらしを支える人々のおもいや
願いについて学びを深めることで，
地域社会に対する誇りと愛情をもち，
地域社会と自分とのつながりを考える子ども**

今年度，第一回目の4年部会では参会者それぞれの社会科の実践のうまくいったことや困りについて交流し，今年度の京都市小学校社会科研究会の研究構想につなげていくことで，今年度の方向性について共有した。

今後の部会においても授業づくりをする中で，それぞれの考えを出し合い共有することを大切に，部会運営を進めていきたい。

4年部会テーマ実現のための方策

視点1

子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

学習指導要領をもとに「教材の何について調べるのか」「教材を通して何を考えるのか」等，確かな教材分析を行い，単元を構想する。また，単元同士のつながりも意識した単元構想にしていく。

視点2

子どもと「社会」をつなげる授業づくり

子どもの問題意識が連続することを意識して単元を構想する。その上で，社会的事象の見方・考え方を働かせながら，主体的・対話的に問題を解決していく学習を展開できるように工夫する。特に，子どもたちにとって対話的な学習活動が必然性のあるものになるよう意識したい。

また，子どもたちが学ぶ社会事象を身近に捉えさせることで，地域社会と自分とのつながりを考えることが出来るようにしていきたい。

視点3

子どもの意欲や深い学びにつながる評価

ふりかえりをする場面や視点を意図的に設定することで，子ども自身が自分の学びを実感出来るようにする。

【授業実践予定】
①11月下旬「自然災害から人々を守る」
大塚小学校　勝部　順也　教諭
②2月下旬「ゆたかな自然を生かす宮津市」
嵯峨小学校　今野　祐介　教諭

〈文責　唐橋小　仙波　俊輔〉

5年部会

◇5年部会テーマ◇

社会のあり様や，そこに生きる人々の姿から学びを深め，よりよい社会へ向けて，社会と自分とのつながりを考えようとする子ども

5年部会では，国土の特色，産業の現状，社会の情報化について，国民生活との関連を踏まえて理解すること，また，社会的事象の特色や社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断する力を養うとともに，それらを基に議論したりする力を養うことを中心に授業づくりを進めていきたいと考えている。また，指導案検討だけにならず，定期的な勉強会の開催や日頃の社会科授業についての実践交流などを行っていき，共に学び合っていけるような部会にしていきたい。

5年部会テーマ実現のための方策

視点1

子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

- 子どもの思考の流れを大切にした単元構想の工夫を図る。とくに子どもが捉える問いを大切にした学習問題を作り，そして，学習問題を追及・解決する問題解決学習を進める。
- 「自らの学びを調整する」という視点を単元構想の中に適切に位置づける。

視点2

子どもと「社会」をつなげる授業づくり

- 子どもにとって社会的事象が身近に捉えられたり，思考の流れを想定したりできるように資料提示を工夫する。
- 社会にみられる課題を理解したうえで，よりよい社会の実現に向けて必要なことや，自分と社会との関わりについて問い，選択・判断し議論を深める。

視点3

子どもの意欲や深い学びにつながる評価

- ふりかえりをする場面や視点を意図的に設定し，子どもが自分の学びを実感できるようにする。

【授業実践予定】

①11月2日「自動車をつくる工業」
金閣小学校　川上ありさ　教諭

②11月下旬「自動車をつくる工業」
朱雀第一小学校　根津　亮介　教諭

〈文責　紫野小　林　奈央人〉

6年部会

◇6年部会テーマ◇

よりよい社会をつくろうとしている先人や今を生きる人の営みから学びを深め，社会と自分とのつながりを考える子ども

6年部会では，研究部の方向性を受け，学んだことをいかに自分ごととして捉えられるかを大切にした社会科授業の構築を目指していきたい。そのためには，学年の枠にとらわれるのではなく，他学年と連携しながら，柔軟性のある部会の形を模索していきたい。さらに，社研の裾野を広げるために，ニーズに合わせた勉強会や研修会を進めていきたい。

6年部会テーマ実現のための方策

視点1

子どもと「社会」がつながる単元構想の工夫

単元を構想する際には，既習事項をもとに予想したり，既習事項をふり返ったりできるようにする。そうすることで，単に知識を得たということにとどまらず，考えが広がったり，深まったりするようにしたい。また，単元の学習問題を子どもたち自身の学びに位置づけることで，自らの学びをふり返り，調整できるようにしたい。

視点2

子どもと「社会」をつなげる授業づくり

子どもと社会をつなげるためには，「学級（授業）の問い」が「自分自身の問い」になっているかどうかが，大切なポイントであると考える。見方･考え方を働かせることができるような「問い」を検討していきたい。また，社会的事象を様々な立場の視点から学ぶことで，多角的に考えられる子どもたちを育てていきたい。

視点3

子どもの意欲や深い学びにつながる評価

授業の終末での「ふり返り」は，焦点化して書くことで，シンプルかつ妥当性のある評価ができるようにする。また，評価する内容や視点をきちんと子どもたちに示しておくことで，全員がゴールを意識し，お互いに評価し合えるような単元や授業の在り方を検討していきたい。

【授業実践予定】

①1月下旬「新しい日本，平和な日本へ」
梅津小学校　岩本　雅生　教諭

②3月上旬「世界の未来と日本の役割」
醍醐小学校　松下　　亮　教諭

〈文責　桂川小　橋本　堅吾〉

今，「学びに向かう力」をどのように培っていくのか

極覧会　会長　　岩　渕　信　明

毎朝，７時40分頃になると，子ども見守りボランティアとして通学路に立つ。「おはようございます。」「行ってらっしゃい。」と声かけをしている。マスクをしながらも，大きな声で挨拶をする子，頭を下げて通り過ぎる子，黙って通っていく子，様々である。北からは中学校へ向かう生徒たちがやって来る。中学生も「おはようございます。」と挨拶をして通る子が多くなってきた。ある時「元気ですか。」と声をかけたら，次の日から「元気でーす。」と言って通るようになった。それ以降，毎日「今日も元気でーす。」と声をかけて通り過ぎる４，５人の女子中学生。テスト期間中は，「テストがんばれ。」と声をかけると，多くの中学生は「がんばってきまーす。」と返してくる。

９月中頃，長靴をビニル袋に入れてやってきた５年生は「今日は稲刈りの見学です。」とニコニコしている。「稲刈りは誰がするの。」ときくと「地域の田んぼの先生が機械でやってくれます。」と言う。９時半ごろに見学に行くと，マスクをして，子どもたちが距離を取りながら田んぼの周りに集まっている。地域の方が４，５人，稲刈り機を田んぼに入れて子どもたちに説明をしている。５，６人の大学生の男女が「ボランティアできました。」と言っている。

コロナ禍で，大人も子どもたちも，今までのような活動ができなくなっている。みんなで思い切り遊ぶことができないし，面白くないとのこと。しかし，田んぼでは，田んぼの先生の話を聞いて稲刈りをし，そのあと，わらを使ってしめ縄づくりをする。それが結構面白いと言っている。地域の方々も子どもの学習をしっかりと応援している。

GIGAスクール構想で，子どもはひとり１台ダブレットを持って学習をしているようであるが，意欲的に学習しているのだろうか。問題意識を持って追究活動を進め，友達と意見交流をしながら深め合う学習活動が，ややもすると，消極的な受け身の学習になっていないだろうか。新型コロナ感染予防のため，グループの話し合い活動，製作活動，実験・実習など，子ども同士が密になる活動は減っているようである。その結果，どうしても指導者が説明をして理解を促す活動が多くなってしまう。学校や幼稚園などで，新型コロナウィルスに感染する子どもが出ている現状ではやむを得ない。

「こんな時こそ，心は密に」という横断幕を掲げている学校もある。てっとり早く，知識理解に走るのではなく，一人ひとりの問題意識を大切に，意見交流を重ねながら，調べ・追究をする活動を地道に進めたいものである。

７時40分頃に，走ってくる子どもたちが何人もいる。「こんな早く学校へ行ってどうするの。」ときくと，「みんなと遊ぶんや。朝はあんまり人がいないし大丈夫。」と言う。子ども同士が密にならず，それでいて楽しく遊びたい，そんな思いなのだろうか。コロナ禍で人と人とが切れていくことが心配である。新型コロナウィルス感染予防対策を講じながら，「学びに向かう力」をどのように培っていくのか，私たちはそれぞれの立場で考えていかなければならない。